

〔体験版〕

殺し屋は聖女を檻に飼う

く攫われた聖女は、檻の中で執着に蕩かされるく

藍沢蜜

蜜檻

第一章 檻と聖痕

綾香は困惑と戸惑いの中、ただ男から与えられる快樂に身を委ねていた。男は綾香の胸を包み込むように揉みながら、すでに固く主張している乳首を親指でコリコリと弄ぶ。

「ああっ…んっ！あっあっ…あん！」

ビクンと綾香の身体が震える。それでも男は綾香への愛撫をやめない。やめるどころかどんどんねちっこくてしつこいものになっているような気がした。

ちらりと男の顔を何度見ても、男は綺麗に整った顔のまま、表情は崩れることはない。

「乳首、そんなに気持ちいいか？」

「そ、そんなこと…っ…聞かないでっ…ふあああ…」

「いいぞ、そのまま集中しろ」

そう言って男は延々と綾香の乳首をコリコリし続ける。頭が真っ白になって、なにも考えられない。

どうしてこんなことになってしまったんだろう。綾香はそんなことを思いながら、どんどん押し寄せてくる快樂の波に溺れていった。

夜明け前の施療室は、素足の裏から冷えてくる。

石の床は季節に関わりなくいつも同じ温度をされていて、綾香はこの冷たさで一日が始まる朝を、もう十二年続けていた。香炉から立つ白檀の煙が、天井の低いところで薄く層になっている。祈祷の始まりを告げる鐘はまだ鳴らない。窓の棧には誰かが置き忘れた読みかけの祈祷書が伏せてあって、頁の角が湿気を吸って波打っていた。

誰のものだろう、と毎朝思う。訊ける相手はいない。

「聖女様。本日は二件です」

扉の外から、抑えた声でした。柩木司祭はいつも、砂糖を煮詰めたような声で綾香に声を掛ける。三甘すぎて喉に残るような不快感を覚える声。

「一件目は六時からです。お支度を」

「……はい」

返事をしてから、綾香は白い祭服に袖を通した。襟元のボタンを上までとめる。左胸の上、心臓のすぐそばに、淡い紋様が肌に浮いている。花卉とも焰ともつかない形。それを聖痕、と教団は呼んでいた。

この聖痕があるがゆえに、この教団の人たちは綾香のことを聖女様、と呼ぶ。一線を引かれてい



るような感じがして、それが綾香にはものすごく寂しかった。

そしてこの力を使うたび、綾香の身体にはある変化があった。胸は張り、その先端にある乳首が固く尖り出す。身体の奥から湧き上がる鈍い熱さはやがて、甘痒い疼きへと変わるのだ。

――それは穢れた反応です。聖女の器が穢れれば、力も濁る。

十歳の冬にそう教えられてから、綾香は疼きを誰にも言わずにきた。しかし成長するほどに乳首の感度は上がっていき、その度に綾香は戸惑った。羞恥と罪悪感、それと同時にある感情が綾香に芽生える。

触りたい。乳首に触りたい。触ってほしい。

そんなことを思うたび、綾香はぶんぶんと首を左右に振って、その穢れた感情を打ち消してきた。そしていままでずっと押し殺して生きてきたのだ。

六時の患者は、白髪の実業家だった。肝臓を悪くしているらしい。付き添いの秘書が革の鞆を抱えたまま、施療室の隅で目を伏せている。

「では、失礼いたします」

綾香は男の背に両の掌を当て、目を閉じた。

てのひらの下で、他人の体の内側が透けるふうに知覚される。淀んだ場所。ほつれた場所。そこへ自分の内側から何かが流れ出していく。温かいものが出ていって、代わりに冷たさが指先から染みってくる。

左胸の聖痕が、じわりと熱を帯びた。

「……っ」

熱は服の下で肌を炙り、ゆっくりと胸と乳首へ向かって降りていく。息が浅くなりそうになるのを、喉で殺した。だめ。これは穢れ。感じては、いけないもの。

「――おお」

男が声を上げた。

「痛みが、消えた。嘘のようだ」

「神の御業でございます」

柾木が滑らかに引き取って、頭を下げた。男と秘書が退出していく。廊下の膳に、供物の蜜柑が積まれているのがちらりと見えた。あれは信者のもとに届くのだろうか。届いたことを、綾香は一度も確かめられたことがない。

「聖女様」

柾木がこちらを向いた。目が、下着をつけることを禁じられている綾香の胸元で一度止まる。つんと立ち上がった乳首が、薄い布の下でしっかり主張していて、柾木は静かに生唾をのんだ。

外界のものは身にまとはいけない。この教団に囚われてからずっと、綾香はそう言われて服は聖女が着るべきものにふさわしいとされる白いワンピース一枚だけ。力を使う時だけは祭服を着ることを許されていた。

「次は九時に」

「……はい」

柁木が出ていつてから、綾香は静かに胸を押さえる。触りたい。ちよつとでも良いから。綾香はほぼ無意識に、布越しにそつと乳首に触れる。

「んくっ…」

途端に全身に駆け巡る快感に、綾香は慌てて手を離した。

「だめ…こんなのだめっ」

自分に言い聞かせて、荒い呼吸を落ち着かせるように何度も深呼吸した。その時ふと、両手の爪がまた少し白くなっていることに気づいた。根元の色が抜けて、爪半月との境が曖昧になっていた。力を使った日はいつもこうだ。指先が冷える。爪の色が薄くなる。乳首への感度もだけど、それ以上に力を使うたびに命を削り落としているような、そんな不安定な感覚が綾香を襲っていた。

無意識に綾香は窓の外を見た。高い塀。その上の空だけが、この部屋から見えるすべてだった。九時の患者が帰ったあと、綾香は洗い場へ水を汲みに出た。付き添いの監視がひとり付くのが決まりだが、今朝の当番の老女は耳が遠く、廊下の長椅子でうつらうつらしている。

洗い場の隅に、厨房働きの少年がいた。十かそこらの、袖の擦り切れた子だ。左の前腕を右手で庇って、水瓶の陰にしゃがみ込んでいる。

「……どうしたの？」

声を掛けると、少年はビクリと跳ねて驚いて、腕を背中に隠した。隠しきれなかった手首の先に、赤く爛れた皮膚が見えた。火傷。それも今朝のものだ。

「な、なんでもないです。鍋に、ちょっと触っただけで」

「見せて」

「でも……聖女様の力は、献金した方のためのものであって。俺なんかのためにお使いいただくなんて……」

献金。その言葉を、この子はきつと意味も分からず覚えさせられている。綾香はしゃがんで、少年と目の高さを合わせた。

「誰にも言わなければ大丈夫」

綾香が微笑みながらそう言うと、少年がおそろおそろ腕を出す。火傷の上に掌をかざして、目を閉じた。内側から温かいものが流れ出ていく。左胸の聖痕がまた熱を持ち、朝の疼きの残りと重なって、下腹の奥にまでじんと甘く痺れた。綾香は唇を噛んで堪えた。

火傷が薄れて、新しい皮膚の色に変わっていく。少年は目を丸くして、それから泣きそうな顔で何度も頭を下げ、駆けていった。

ひとりになった洗い場で、綾香は両手を握り込んだ。指先の冷えが、さっきより一節分、上がってきている。

ばかなことをしていると思う。

減るのは、わたしの命なのに。

なのにやめられない。目の前で苦しんでいる人を、見なかったことにはできない。聖女と崇められているが故の責任感に、綾香の心はどんどん擦り切れていった。



その夜、綾香は柾木の私室に呼ばれた。

夜の呼び出しは月に一度あるかないかで、大抵は翌日の施療の打ち合わせだった。それでも廊下を歩く足は重くなる。柾木の私室は香の匂いがしない。代わりに酒の匂いがする。

「失礼、いたします」

扉を開けると、柾木は長椅子に掛けて硝子の杯を傾けていた。卓上の燭台に火が入っている。電灯のある部屋でわざわざ蠟燭を灯すのが、この人の癖だった。

「聖女様。まあ、お掛けなさい」

「……立ったままで、結構です」

「つれないことを」

柾木が笑って立ち上がる。杯を置いた手が、こちらへ伸びてくる。綾香は一步引いた。引いた分だけ、柾木は詰めてくる。壁が背に近い。砂糖を煮詰めた声が、耳のそばまで来た。

綾香の頬、耳たぶ、そして首筋へと柁木の手が滑り降りていく。

嫌悪感からぴくりと小さく震えた綾香に、柁木は聖職者らしからぬにたりとした笑いを口元だけに浮かべる。

柁木の手が綾香の肩に滑り降り、指に強弱をつけるように二の腕に触れる。二の腕を揉まれる感覚に綾香はさらに後ずさると、ついに壁に背中が当たった。

「なにか私に手伝ってほしいことはある？」

「いえ：ありません」

「嘘は良くない。聖女様、貴方の身体は――」

そこで声が途切れた。

風の抜ける音に似た、短い音がひとつ。それだけだった。

柁木の体が、糸の切れた操り人形の落ち方で床に崩れた。蠟燭の火が揺れて、倒れた男のこめかみから細く伝うものを照らした。赤。絨毯に、ゆっくり滲みていく赤。

声が出なかった。悲鳴というものは、本当に驚いたときには出ないのだと、綾香はそのとき知った。

見上げると、窓辺に男が立っていた。

黒ずくめ。細身の長い銃を提げている。銃口の先に、筒状のものが付いているのが素人目にも分かった。音を消すためのもの。

男は冷たい目で柁木を見下ろすだけ。それからこちらを向いた。

若い。まだ二十代の半ばに見える。整った顔に、表情と呼べるものがなにひとつ載っていない。男は懷から紙片を出した。視線が紙と綾香の間を一度往復する。

「高瀬綾香だな」

初めて聞く声は、低く、乾いていた。

「――処分対象」

わたしの、名前。

場違いにも、綾香が最初に思ったのはそれだった。

この人はいま、わたしを名前で呼んだ。

聖女様ではなく、高瀬綾香と…。

銃口が、持ち上がる。

綾香は静かに目を閉じた。不思議と怖くない。やっと楽になれる。ずっと前からこの瞬間を待っていたのかもしれない。終わるなら。この堀の中で緩慢に削られて終わるくらいなら、いっそ――。しかしいつまで経っても、部屋は静かなままだった。

おそろおそろ目を上げると、男は銃口を下げていた。眉ひとつ動いていないのに、紙片を持つ指だけが、僅かに白くなるほど力んでいた。

「……変わっていないな」

男が、低く呟いた。

「え……？」

「なんでもない」

紙片が懷に消え、代わりに白いハンカチを男が取り出す。小瓶の液体をハンカチに染み込ませた直後、綾香の手首を掴んだ。

そしてハンカチで綾香の鼻と口を一気に覆う。

「んっ!？」

「寝ろ」

「んっんっ……んー!」

慌てて浅い呼吸が続くほど、ハンカチに染み込んだ薬が綾香の筋肉の力を奪っていく。

だめ、倒れる。

意識が朦朧とする中、男の力強い腕が綾香の腰に回され、引き寄せられる。かろうじて意識は完全に失わなかったが、身体がいうことをきかない。

男はそのまま綾香の膝裏と背中に腕を回し、抱き上げる。

「まって……どこに……」

連れて行くの？そこまで言うことができず、綾香は完全に意識を失った。

目を覚ますと、鉄格子が見えた。

天井の低い、倉庫めいた広い部屋。その一角が、太い鉄の格子で囲われている。格子の内側に古い寝台と毛布、水差し。綾香はその寝台に寝かされていた。

薬の影響でまだぼーっとするが、綾香は静かに身体を起こす。

格子の向こう、少し離れた場所に作業机がある。手元の灯りの下で、あの男が銃を分解していた。部品がひとつずつ、布の上に等間隔で並べられていく。男は布で、金属の一片一片を拭っている。急がず、飛ばさず、同じ律で。殺すための道具に触れる手つきが、綾香には手当てに似て見えた。似ていると思ってしまうから、その考えの不謹慎さに自分でうろたえた。

「起きたか」

顔も上げずに男が言った。

「……ここは？」

「俺の家だ。あんたはしばらくそこにいろ」

「そこ、って」

綾香は格子を見た。

「……檻、ですよね」

「元は武器庫だ。鍵が丈夫なだけの部屋だと思え」

男は部品を組み戻し始めた。ばらばらだったものが形に還っていく。最後に、側面の小さな突起を指で確かめて倒す気配があった。

「教団は明日には気づいてあんたを探しにくるはずだ」

「殺さないんですか？わたしのこと」

男の手が、一瞬だけ止まった。組み上がった銃を布に置く音が、返事の代わりに落ちた。

「……規則を言う。ひとつ、逃げようとするな。街の作りを知らないあんたが夜に出れば、教団より先に別のものに拾われる。拾われたら最後、どうなるか想像することくらいはできるよな？」

ギラリと光る男の目に、綾香の背中にゾクリとしたものが走る。青ざめる綾香をよそに、男は言葉が続けた。

「ふたつ、出された飯は残さず食え。みつっ——」

男はそこで初めて顔を上げ、格子越しに綾香を見た。

「体調を隠すな。痛いなら痛い、動けないなら動けないと言え。分かったか」

「……どうして」

「あ？」

「どうして、そんな……まるで飼うみたいなこと」

言ってから、自分の言葉に自分で疎んだ。男を怒らせたなら、と思ったのだ。なのに男は、怒らな

かった。少し黙って、視線を手元の銃に戻しただけだった。

「あんたを探してるのは教団だけじゃない。柾木を消したがつた側も、生き証人の聖女の顔は見たいはずだ。……外はいま、あんたにとって全部が銃口だ。ここが一番、弾の来ない場所だと思え」

弾の来ない場所。その言い方を、綾香は胸の中で繰り返した。檻をこの人はそう呼ぶのか。水差しに手を伸ばすと、硝子のコップが伏せて添えてあった。注いで飲む。冷たい水は喉に染み

た。

「寝ろ。朝になったら飯を出す」

嘘みたいだ、と綾香は思った。処分対象、とあの紙は言っていたのに。この人は毛布を干して、水を置いて、朝食の話をしている。

安堵に似た何かが胸をゆるめた、そのときだった。

どく、と左胸の奥で聖痕が脈打った。

「……あ……っ」

熱い。昼間の施療の残り火が、恐怖と緊張で燻り続けていたものが、気の緩んだ隙を突いて一気に噴き上がってくる。熱は肌の下を這って、乳首へ集まっていく。じん、と痺れるほど尖って、布地に擦れるだけで息が跳ねそうになる。

だめ。こんな、人のいる場所で。

綾香は毛布を引き寄せ、胸元を両腕で押さえて丸くなった。押さえた自分の腕の圧すら刺激になっ

て、奥歯を噛む。穢れ。これは穢れ。感じては、いけない――。

「おい」

声が、近い。

顔を上げると、男が格子のすぐ外に立っていた。灯りを背にして、表情は見えない。

「どうした」

「な……なんでも、ありません」

「胸を押さえて蹲るのが、なんでもないわけがあるか」

男の声は平坦なままだったが、僅かに硬くなった。

「毒か。教団に何か仕込まれてるのか？」

「ちが……違い、ます」

「じゃあ発信器か」

男は独り言の速さで言って、腰の鍵束を外した。錠の回る重い音がして、格子の扉が開く。

「教団は道具に必ず鎖を付ける。皮膚の下に埋める型もある。……調べる。服の下、確かめるぞ」

「え！？……やっ、待って……」

「暴れるな。手間が増える」

寝台が、男の重みで軋んだ。

毛布が剥がされて、綾香は寝台の上へ仰向けに寝かされる。男は綾香の正面に片膝を着いてしゃがんだ。銃を扱っていた手が、服の襟元のボタンに掛かった。

「や……っ」

「じっとしてろ」

ボタンがひとつずつ外されていく。乱暴さはなかった。それがかえって、逃げ場をなくした。ひとつ。またひとつ。夜気が鎖骨に触れて、綾香は肩を竦めた。

「……あ、あの、ほんとうに、何も埋まってなんて……」

「それを決めるのは俺だ」

布越しに、大きな掌が左の胸に当てられた。

「ん……っ」

抑えたはずの音が、鼻から抜けた。掌は探るものだった。骨に沿って、布の上から輪郭を確かめていく。異物を探す手つき。なのに、疼きで張り詰めた胸には、その事務的な圧こそが毒だった。掌がかたちを辿るたび、乳首が布に擦れて、痺れが背骨まで走る。

「きゃっ……!」

「……硬いな」

男が、ふと手を止めた。

「や、そこ、は……っ」

襟元が、大きく開かれた。

左胸の上で、聖痕が淡く光っていた。花卉とも焰ともつかない紋様が、内側から火を透かして、呼吸に合わせて明滅している。

「……光ってる。これが聖痕か」

「やあ……み、ないで……ください……！」

抵抗しようとする綾香の両手は男の手によって容易くまとめ上げられ、頭上に縫い付けられるように押さえつけられた。

「熱いな」

指の背が、紋様にそつと触れた。それだけで、綾香の腰が跳ねた。

「あん……っ」

「痛むのか」

綾香は首を何度も左右に振る。振ることが精一杯だった。

「じゃあ、なんだ」

男の目が、初めてまっすぐに綾香の顔を見た。暗い色の瞳だった。嘘の通らなそうな、真っ直ぐな眼差し。この人相手に、十二年の言い訳は通らない。

「……うづく、ん、です……力を、つけた、あと……いつも……」

「疼く」

男は復唱して、視線を落とした。開いた襟の内で、乳首が布を持ち上げて尖っているのを、隠しようにもなく見られている。羞恥で目の前が煮えた。なのに疼きは、見られていることでもいいそう強くなった。体は、わたしのいうことをきいてくれない。

「教団では、どうしてた」

「……おさえて……消えるまで、ずっと、耐えて……。かんじては、いけないものだから。穢れ、だから……」

「穢れ」

男の声が、そこだけ温度を変えた。嫌悪。ただしそれは綾香に向いたものではなかった。

一八

「あいつらは我慢させたのか？」

「え……」

「……いいか。一度だけ確かめる」

指の背が、布の上から、尖った乳首をかすめた。

「ああ……っ！」

跳ねた腰を、腰骨に添えた片手が押さえた。声が、自分のものと思えない高さで出た。慌てて両手で口を覆う。

「……感度が良い。押さえ込んで消えるものじゃない、これは」

男は淡々と言った。淡々と言いながら、その指は布の縁に掛かって、ゆっくりと引き下げた。夜気に、胸が晒される。

「やあ！ダメッ！」

乳首は自分でも見たことのない色に充血して、ふるえていた。

「お願い……み、ないで……っ」

「見ないで検分はできない」

「けん、ぶん……って……」

それでも男は、手を引かなかった。

「触るぞ」

指先が、乳首の周りを円を描くように撫でた。触れそうで、触れない距離。

「んん……っ、ふ……」

「力を使うたび、こうなるんだろう。押さえて、耐えて、誰にも言わずに」

男はくるくると指で乳首の周りを撫でながら淡々と話す。周回は続く。芯のところだけに、決して触れない。疼きは行き場を失って、綾香の膝を震わせた。いつのまにか、次を待っていた。次にあの指がどこへ来るのか、肌が待ってしまっている。

「や、あ……なんで……さわって、くれな……っ」

言ってしまったから、耳まで熱くなった。男の眉が、僅かに上がる。

「触ってほいいのか」

「ち、ちが……いまのは……っ」

「どっちだ」

意地悪な問いなのに、声はどこまでも平坦だった。焦らされた乳首が、夜気の中でじんじんと脈打っている。十二年分の抑圧が、喉元まで迫り上がって、綾香はこくり、と頷いてしまった。頷いた瞬間、視界が涙で滲んだ。こわい。こわいのに、この手が離れていくことの方が、いまは、こわい。

「……そうか」

指の腹が、両方の乳首を同時にやわらかく押し潰した。

「あっ……ああ……！」

電流という言葉しか浮かばなかった。つま先が丸まり、背が勝手にしなる。男の指は緩急を知っていた。クリクリと摘まんだり転がしたり、ふいに力を抜いて撫でるだけになる。右はきつく、左はやさしく。左右で違うことをされると、頭の中がかき混ぜられて、何も考えられなくなった。

「あ、や……りようほう、は……っ、へん、に……なっちゃ……」

「なればいい」

「あっあっ……あん！……んんんうっ！」

耳のすぐそばで、声がした。いつのまにか男の唇が、耳朶に触れる距離にあった。低い声が、吐息ごと注がれる。

「――誰も見てない。俺しかない」

「ふあ……あ……っ」

「声も我慢するな。ここは聖堂じゃない」

囁きと同時に、両方の乳首をキュツと摘ままれて、綾香の中で何かの栓が抜けた。声が、堰を切った。

「あっ、あ……だめ、それ……あぁっ、や、ぁん……!!」

「だめじゃないだろ。腰、揺れてる」

「い、わない……で、ください……っ、あ!あぁん!」

涙目で睨みつけると、男は虚を突かれた顔をして、それから、ほんの短く息だけで笑った。笑うと、この人はこんな顔をするのか。場違いな発見が、胸の疼きと一緒に体の芯へ落ちていく。

「素直だな。……なら、教えてやる」

指先が、充血しきった乳首を、根元からきゅう、と絞った。

「ひぁあっ……!!」

「あんたのここ、もう限界だ。――胸だけでイけそうだな、あんた」

「え……イく?」

「試すぞ」

宣告は短かった。なのに指は、すぐには来なかった。

「や……なん、で……」

「焦るな」

男の掌は、胸のふくらみを、外側からゆっくり持ち上げるだけだった。張り詰めた乳首には、指一本触れない。胸の重さを量る手つきで、下から、横から、形を変えられる。ぷるぷると揺らされるたび、尖りきった乳首が空気に擦れて、それだけで噁り泣きに似た声が漏れた。

「あ……ふ、……う、う……」

「いい声だ。……ほら、自分で見てみる。触ってもいいのに、こんなに膨らんで」

「み、ません……っ、そんなの……」

「見ろ」

命令は静かで、逆らえなかった。おそろおそろ視線を下げる。自分の乳首が、男の掌の中で赤く色づいて、つん、と上を向いている。淫らだ、と思った。思った瞬間、聖痕がどくと熱を上げて、待ちわびた芯がさらに硬くなるのが自分でも分かった。

「見ただけで硬くなった。……素直な体だ。よくできてる」

「そんな褒め方……いやです……っ」

「褒めてる自覚はない。検分の報告だ」

嘘だ。声の底が、さっきより低い。この人も、平坦なだけではいらなくなっている。それに気づけてしまったことが、なぜか一番、体に響いた。

「頼み方は、さっき覚えたな」

耳朵に、また吐息が触れる。

「言えたら、触ってやる」

「……っ、う……」

これまでずっと疼きは押し殺すものだった。口に出すことは、穢れを認めることだった。なのにいま、喉の奥で言葉が形になりたがっている。だって、もう、もう、むり。

「さ……さわって、……ください……せんたん、……もう、じんじんして、……おかしく、なりそうで……っ」

「上出来だ」

直後、指は約束を守った。コリコリ転がされ、扱かれ、押し潰され、時折びん、と弾かれる。右と左が別々の律で責められて、綾香の思考は何度も途切れる。

「あん……あっ、あっ……や、なにか、くる……っ、こわ、い……!」

「怖くない」

声は、囁きのまま揺るがなかった。

「体に訊け。……ほら、来い」

乳首を同時にギョツと強く摘まみ上げられた瞬間。

聖痕が、燃えた。

「あ……あああああああ——っ！」

熱が胸の先から全身へ弾けて、綾香の背は弓なりに反った。びく、びく、と自分の体が跳ね続けるのを、他人事の遠さで感じていた。長い長い波が引いていくまで、男は何も言わず、背中を支えたままでいた。

「……は……あ……」

「イツたな」

耳元で、事実だけが告げられた。羞恥のあまり顔を上げられない綾香の髪に、男の呼気がかかる。

「胸だけで、イけた。……初めてか」

「……っ、き、かないで、ください……」

「答えなくていい。顔に書いてある」

ひどい。ひどいの、その声は責めていなかった。男は綾香の乱れた襟元を、来たときと同じ手つきで、ひとつずつ元に戻した。ボタンを留める指は、銃を組み戻すときと同じ律をしていた。

「い、いまの……は……わたし……穢れて……」

「穢れとか、くだらねえ」

男は遮った。短く、吐き捨てる調子で。

「体が正直なだけだ。正直なものに、穢れも聖もあるか」

毛布が、肩に掛けられた。ふわ、と陽の匂いがした。

「寝ろ。……身体が疼きだしたら我慢するな。言え」

「い、言え、って……そんなの、言えるわけ……」

「なら、押さえて蹲るな。心臓に悪い」

男は立ち上がりかけて、思い直したのか、水差しから杯に水を注いだ。差し出された杯を、綾香は両手で受け取る。指が触れた。銃を扱う手なのに、体温は普通の人のものだった。飲み干すまで、男は急かさずに待っていた。

「……あの」

「なんだ」

「お名前を……訊いても、いいですか。あなたの」

男の目が、僅かに細くなった。値踏みの間があった。

「……知ってどうする」

「呼ぶものが、ないと……不便、なので。あなた、とか、殺し屋さん、とか、そんなふうにか」
「殺し屋さん」

男は復唱して、短く息を吐いた。呆れたのか、笑ったのか、判別のつかない吐き方だった。

「……そのうち教える。あんたがここの飯に慣れたらな」

「な、なんですか、その条件……」

「規則ふたつ目の様子見だ。寝ろ」

男は檻を出て、錠を下ろし、作業机に戻っていく。何事もなかった顔で椅子に掛け、組み上げたばかりの銃を、また布で拭い始めた。拭き終えた銃を仕舞う前に、男は側面の小さな突起を指で確かめて倒した。来たときの部屋でも見た仕草だった。あれはたぶん、暴発を止めるためのもの。安全装置、という言葉を、綾香は昔読んだ本の隅で覚えていた。

綾香は毛布の中で、まだ収まらない鼓動を聞いていた。左胸の聖痕は、嵐のあとの凪いだ熱を残して、静かに明滅している。指先は——冷えていなかった。力を使ったわけではないのだから当たり前なのに、体の芯に灯った温かさが、いつまでも消えなかった。

きもちよかった…。

そう思ってしまった綾香は顔に一気に熱が集まり、男に見えないように顔を毛布に埋める。

格子の向こうで、布が金属を拭う微かな音が、規則正しく続いている。

聖堂の夜は、静かではなかった。静かなふりをしているだけだった。廊下を巡回する足音。どこかの房で誰かが漏らす祈りの声。壁の向こうの、聞こえないことにしなければならぬ物音。綾香は十二年、それらを数えないために目を閉じてきた。

この部屋の音は、数えていられる。布の音。時折、部品同士の触れる硬い音。椅子の脚が床を擦る音。どれも、誰かを踏みつけていない音だった。

明日、と綾香は思った。明日、朝になったら飯を出す、とあの人は言った。明日のことを約束されたのは、いつぶりだろう。教団の明日はいつも、務めの予定でしかなかった。

音を数えているうちに、瞼が重くなってくる。おかしい。檻の中なのに。攫われて、きたのに。眠りに落ちる間際、綾香は答えの返らない問いを、胸の内ですとつだけ転がした。

（どうして、私を殺さなかったんですか？）

第二章 檻の中の食卓

味噌汁の匂いで、綾香は目が覚めた。

鉄格子。低い天井。陽の匂いの毛布。そうだ、攫われたんだった。檻の中で二度目の朝――なのに、いい匂いで目を覚ましている。

「起きたなら顔を洗え。格子の右奥だ」

男は台所から顔も上げずに言った。菜箸の先で、卵がじゅ、と音を立てる。昨夜銃を拭っていた手が、卵を焼いている。その取り合わせに、綾香は寝起きの頭で少し混乱した。

顔を洗って戻ると、格子の扉が開いていた。

「出ろ。飯だ」

「で、出ていいんですか」

「食卓は檻の外にある。逃げる元気があるなら、食ってからにしろ」

冗談か本気か分からないまま、おそるおそる席につく。湯気の立つ味噌汁。白い飯。焼いた卵と青菜。

器からは柔らかな湯気が立っている。

たったそれだけのことを、綾香は凝視してしまった。聖堂の食事は、房に届く頃には必ず冷めて

いた。

「……どうした。嫌いなものでもあるか」

「い、いえ。いただきます」

味噌汁を啜った。ぱちりと綾香は大きく瞬きした。

「お、美味しいです！お出汁がじんわり身体に染み込む感じの優しい味！」

こんな仏頂面な人がこんなにも美味しいお味噌汁を作れるなんて、と綾香には驚きすぎてつい饒舌になる。

「うるさい、黙って食べろ」

「あ…はい、すみません…」

急に恥ずかしさが強くなった綾香はその後は黙々と食べる。静かすぎる食卓はどうにも落ち着か二九
ず、綾香はつい視線を泳がせた。

その時、ある一点に視線が止まった。男の耳が真っ赤になっていたのだ。表情は冷たいのに、耳
だけがあんなにも赤くなるなんて、もしかして照れてる？

そう思った綾香は思わず嬉しくなって小さく笑う。

「なんだ？」

「いえ、なんでもないです」

「ふん…味噌汁、おかわりあるぞ」

「え？良いんですか？」

「規則ふたつ目に上限はない」

「じゃ、じゃあ、お願いします……！」

差し出したお椀に、男は黙って味噌汁を注いだ。心なしか、具が増えて戻ってきた。

「……すっごくおいしい、です。本当に」

「そうか」

「お料理、いつもご自分でやってるんですか？」

「迂闊に外食なんかしたら顔が割れる」

物騒な理由だが、ごもつともだ。でも料理はすごく上手なものだから、この人のことが、また少し分からなくなる。

「嫌いなものは」

「え？」

「食いもんだ。嫌いなものは作らない」

「……わかりません。選んだことが、なくて。出されたものを、残さず食べるだけだったから」

男の箸が、一瞬止まった。

「……なら、いろいろ作る。食って、消去法で教えろ」

「わあ、楽しみです」

「時間はある。あんたはしばらくここにいるんだからな」
しばらくここにいる。監禁の宣告のはその言葉が、献立の約束みたいに聞こえて――

体験版はここまで

お読みいただき、ありがとうございます。

この続きから、物語はさらに深く堕ちていきます。

しつこく、丁寧に開発されていく夜。初めて結ばれる夜と、初めてのキス。彼の左胸の傷痕に隠された、十二年前の真実。「イッたら、数えろ」――彼が初めて名前を呼ぶ、五回目の波。連れ戻しの檻と、奪還の夜。そして、二度と閉まらない檻の扉。

完全版の仕様。

全九章＋エピローグ、約五万八千字。胸責め・乳首責めは全章搭載、乳首イキ計八回以上、濡れ場九場面。どんなにダークな展開でも、ふたりは必ず救われ、結ばれます。完全ハッピーエンド保証、求婚と懷妊示唆のエピローグ収録。

続きは、製品版でお会いしましょう。

蜜檻（みつおり） 藍沢蜜